東北へ行こうよ

小池 要（埼玉県蓮田市／39歳）

頭のいかれた私たち

毛鉤釣りを始めてしばらくの間、東北はニュージーランドやイエロースストーンやクリスマス島と同じくらい、別世界の夢フィールドだった。しかし当時はたかが釣りのためにわざわざ東北にまで行くなんて、〝釣りのプロ〟か〝頭のいかれた野郎〟しかいないと考えていた。

数年たってどっぷりと毛鉤釣りの魅力に取り付かれてしまった頃、友人とのいつものように釣れない釣り場からの帰り道、誰かが「東北へ遠征に行こう。」とぽつりと言った。私たちもついに〝頭のいかれた野郎〟になったのだ。

誰もがそうであるように、貧しい釣果は自分の腕ではなく釣り場環境のせいで、住んでいる場所から遠く離れるほど、良い釣りが待っていると思い込んでいた。

もっともっと遠くへ

最初の年は、福島の浪江周辺に行った。お昼に入った船宿で食べたコウナゴづくし定食、タマネギ9割の手のひらより大きなかき揚げが2つもついてきて、胃もたれした。そんなつまらないことを今でも思い出して皆で笑っている。

不思議と釣りをした記憶はない。たぶん、誰も釣れなかったのだ。それでもなぜか皆、笑顔だった。

遠征って、釣りだけが目的じゃないのだ。おっさんたちがつるんでマンネリ化した日常から脱出する慰安旅行の口実なのだ。

「次はもっともっと遠くに行かなくてはならないな。」

笑いながら誰かがそう言った。

どこでも良かったのだが、なんとなく有名だし、里川の牧歌的なイメージで（イメージとはだいぶ違っていたが、）岩手の遠野周辺に行くことにした。

初めての遠野は、淡い緑色をしていた。目がよくなったかと錯覚させるような澄んだ空気、早苗、芽吹いたばかりの木々、ホップやタバコの若葉。その中を、清い水がサラサラと流れていた。風呂上りに宿の裏の川へサンダル履きで出かけ、ライズしているイワナを釣る楽しさ。

日常の中にイワナ、ヤマメの住む世界がある環境が、たまらなく魅力的に感じた。その年もたいして釣れた記憶はないが、帰り道、全員一致で「また来年も行くしかないね。」と決まった。

本来のヤマメ、イワナの釣り

遠野周辺には魅力的な川が数多くある。白い砂底の川のイワナは、関東近辺の河川と違い、川の真ん中で堂々と泳いでいる。天井を木々に覆われたその流れでは、ライズではなく川底に沈んでいる岩を探す。岩の上流側に目を凝らすとたいてい揺らめく黒い影が見える。

砂の色と同じ魚体は見えにくいが、太陽の光でできる影がイワナの存在を教えてくれる。見ていると時々ゆっくりと浮上して何かをついばむ。それを友人と順番に1匹ずつ釣っていくのが、たまらなく楽しい。

民家の前を流れる川では、玄関の掃除をしているおばちゃんと目が合い、お互いに少し気まずく会釈してから川へ降りる。流れの筋からはヤマメ、その脇からはイワナ。教科書どおりの場所から当たり前にイワナとヤマメが釣れることに驚く。

竿抜けなんて意識しない釣り。これが本来のヤマメ、イワナ釣りの姿なのだ。

民家から離れた山深い川にはクマも出るらしい。でもそんな川は大きな魚が釣れることもある。友人が釣った38㎝のイワナの大きな口は印象的だった。あの口ならヘビだって食うだろう。

ヘビの毛鉤は難しいが、木にとまっていたミヤマクワガタの毛鉤なら作れるんじゃないかと真剣に考えた。

東北うまいものめぐり

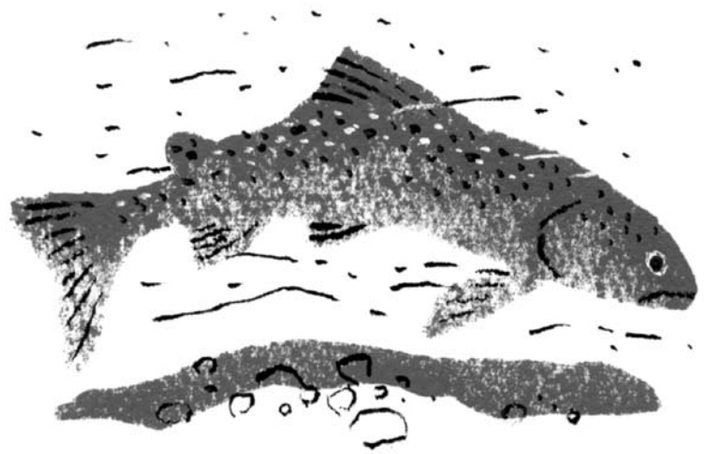
慰安旅行には美味しい食べ物が不可欠だ。座敷わらしの住んでいる宿で出されるイワナの塩焼きは、遠火の弱火の最高傑作だ。

小ぶりのイワナが頭や骨までカリカリに焼かれているが、焦げていない。頭からかぶりつくと、香ばしさが広がる。サクサクの骨を噛み締めるほどに湧き上がってくる旨み。その余韻を酒で洗い流す。

遠野のジンギスカンはあまり知られていないが、観光用の消費を差し引くと日本第一位になるくらい地元ではよく食べられている。

生の新鮮なラム肉は柔らかく臭みが無く、冷凍物のマトンとは次元が違う。真ん中の盛り上がった専用の鉄板で、表面にしっかり焦げ目が付くくらい焼き、肉の脂で一緒に焼いたキャベツとモヤシと甘めのタレをたっぷりと付けて、ほうばる。

香ばしさと肉汁の甘み、ほどよい弾力の肉を噛み締めながら、冷えた生ビールを飲み干す。釣りで乾ききった喉を炭酸がピリピリと刺激し心地よい。ビールの代わりに白いご飯を喉いっぱいまで詰め込むのも悪くない。



遠野から釜石へは、開通したばかりのきれいなトンネルをくぐればすぐに行ける。渓流釣りに飽きたら港で小物釣りも楽しい。

釜石港にはこぢんまりとした飲み屋が多くある。三陸の地のものは何を食べても美味しいが、ぜひ食べて欲しいのがホヤ。

関東で食べるホヤはホヤじゃない。天ぷらにしても旨いが、やっぱり刺身が一番だ。オレンジのプリップリの切り身を口に入れる。ひと噛みすると爆発、口から鼻にかけて鮮烈な潮の香りが弾け飛ぶ。

飲み込んだ後に、ほんわり残る余韻がまた良い。コーヒーもそうだが、適度な余韻は美味しさのひとつだ。

今まで以上に釣りまくる

今年もそろそろ慰安旅行の時期が来た。こんな時だからこそジュリアーニ・ニューヨーク市長のテロ時のスピーチを思い出し、今まで以上に楽しんで遊ぼうと思っている。

ヨメには内緒だが、少し高価なアメリカ製のリールも買ってしまった。こいつにDTの#3ラインを巻いて、お気に入りの竹竿で、初夏の日々を釣りまくる。

ありふれた日常に少しだけ刺激を注入するには旅が最適だ。海外にも憧れるが、私には東北が身の丈にあった旅の場所だと思っている。そして、東北に行ったことのない人には、こっそりと教えてあげる。

「初夏の東北は毛鉤釣り師にとって楽園ですよ。」

Glamorous TOHOKU 特集◎ 東北へ行こう！

東北に行こう…って、はからずも住んでますが？

鈴木圭司（宮城県遠田郡／39歳）

でっけぇカゲロウなんつーやずだべ

初夏の日差しのなか、開けた川原をフライロッド片手に上流に向かって歩く。とりあえず20センチ程のヤマメを釣ることができたので気持ちは軽い。

しかし今日の本当の狙いは、先週逃がしてしまった大物である。目指すは荒雄川と軍沢の出会いにある深くて流れの速いプール。

このあいだは、ライズもないなかフライを流していると、まばたきしている間にそいつはフライを吸い込み、口中の異物を感じ取るや身をよじってジャンプし、着水と同時に上流へ突っ走ったのだった。なんとか止めると今度は流れを下り、それに対応する間も与えずまたまた上流へ…という具合。

最後はなすすべなくプール中ほどにある大きな底石にもぐられ、フックアウトしたのである。

大ヤマメのパワーとスピード、そして自分の力量のなさをまざまざと見せつけられた不様な敗北。

「しかし、今日の俺は先週の俺とはひと味ちがうぞ！ 必ずや…、ありゃ、先行者が。」

なんとも残念なことに、目当ての

東北に行こう！

ポイントで竿を振る餌釣りの爺さんがひとり。どうしたものか迷っていると、こちらに気付いたのか手招きをして曰く、

「でっけぇカゲロウ流れでんだけど、なんつーやずだべ？ あんちゃんフライだがらわがっぺ？」

見ればモンカゲロウのダンがポツリポツリとハッチしているが、まったく喰われることもなく流れ去っているのだった。

おらだいぶ釣ったから

「モンカゲですね。ぜんぜんライズしないっすけど。パタパタしてるヤツはすぐ喰われるんですけどね～。」

「んで、あんだの毛針もパタパタしねぇどダメだなや。」

などと、二人とも川面から目を離さず会話している間もいっこうにライズする気配がない。

「なんだ、魚っこいねぇな。おらだいぶ釣ったからが？」

見れば爺さんの腰にぶら下げたウジエスーパーの大きなビニール袋の中で完全に尺を超えたいかついヤマメが5、6匹入っていて、それはもう、〈魚肉特売中。数量無制限！〉という感じなのであった。

ただただ絶句してふたたび川面に目をやると場違いな程大きな発泡スチロールの箱（漁港なんかでよく見るやつです）がどんぶらこーと流れてきて、

「あれにヤマメ入れたら魚市場みたいになって見栄えしますな。」

なんてくだらない思いつきを口にしかけたまさにその瞬間、ああ、それは起きてしまったのだ。

ブゥワシャッ！！

「ええっ！？ 発泡スチロールにライズした！？」

「なぬーすや～。虫っこかねぇであすたなものさ～。根性の曲がった魚だな。」

あんちゃん、頑張れよ

しばし呆然とするふたりであったが、いまのでやる気をなくしたのか、はたまた今日の獲物に満足したのか爺さんは竿をたたみ、

「あんちゃん、こごでやってみろ。頑張れよ。それがら釣りっこさ来っときはもっと早ぐ起ぎらいん」

と場所を譲ってくれたのだが、日がとっぷりと暮れるまであの手この手で攻めるも一匹も釣れないどころか一回もライズすらせず、あの〝魚箱〟を模した巨大なフライをキャストするには何番ロッドが必要なんだろうと首を捻るしかないのだった。

さてさて、これはもう10年以上も前のお話。キャッチ・アンド・リリース区間ができて多くのフライフィッシャーマンで賑わう前のことで、川にはいろんな道具立ての釣り人やら投網ぶちやらヤスをもった子供らがいたりして（投網はやめてくれ！）、それはそれでなかなかおもしろかったころのこと。聞けば、いまではあのプールもすっかり浅くなってしまったらしい。

行きたい渓がある

鈴木 光（栃木県宇都宮市／48歳）

東北の川や渓を思うと、父方の実家の思い出と深く重なる。

すでに他界している父親は農家の長男坊であったが、自分なりの野心から家を出た経緯があるために、秋田は鷹ノ巣の山深いところにあるその実家と私たちの家族は、ありていに言えば疎遠であった。

私のこれまで、たった一度きりの秋田帰省は、多分小学校入学前くらいのころだった。父の弟つまり叔父さんが、私と兄を小さな沢に連れて行ってくれた。イワナの手づかみだ。

つかみづらいくせに、妙に生き物の実感がある魚の感触と、全身を覆ったアブの噛み跡の痒みは、強烈な夏の東北の思い出になっている。

自分が大人になってから、これほどイワナやヤマメにいれあげることになるとは、もちろんその時は思いもしなかった。

また行きたい東北の渓は、私には決まっているのだ。

Shi's Rod
STUDY TO BE QUIET

シーズロッドのバンブーロッドは、トンキンケーンを使用しております。また、コンダクター、メヌエットのシリーズは、オイル仕上げとなっております。
どうぞ、深みのある色にかわりゆく時間をお楽しみください。

http://shis-rod.com
ホームページをリニューアルしました!

コンダクター（スタンダードタイプ）
1TOP ¥52,290 布袋付
2TOP ¥80,325
布袋・アルミケース付

メヌエット（段巻き仕上げ）
1TOP ¥62,790 布袋付
2TOP ¥90,825
布袋・アルミケース付

◎シーズロッドでは、オーダーメイドによるバンブーロッドも、承っております。ご希望のアクション、サイズ、グリップ、スレッドの色などがございましたら、お気軽にご相談ください。

※アルミケース別売り ¥6,500～
※使用中の破損は生涯補償いたします。
※関東エリア配送無料!
その他の地域は送料の一部として300円をご負担願います。
※カタログもご用意しております。お電話・お手紙・ホームページにてご請求ください。

since 1999
シーズロッド
〒161-0034 東京都新宿区上落合3-16-12
Tel.03(3368)6547